

再読・倉橋惣三

倉橋惣三の「子ども生活」理解を探る

— 保育の「生活」から小学校教科「修身」へのつながり —

見玉衣子

はじめに

倉橋惣三は、昭和初期に、小学校教科「修身」の教授に対して珍しく激しい批判をしています。倫理・道徳性の形成は、古今東西、教育目的の最たるものです。倉橋もまた幼児期の道徳性形成の問題を生涯かけて検討しています。だからこそ、とりわけ小学校低・中学年「修身」への注文は切実だったのだらうと思われれます。ここでは、幼児期の保育の「生活」から小学校教科「修身」へ、倉橋惣三の考えていた連続性を探りたいと思います。

1 「修身教授に関する二三の考察」における批判の内容

倉橋惣三は一九二九（昭和四）年、雑誌『児童教育』六月号に「修身教授に関する二三の考察」という論を出し、同論は翌月『教育論叢』二二二巻一号に転載注1されました。以下、『教育論叢』の記事から概略をたどりますと、

今日の教育法は児童の生活に即することを本旨とするが、中でも「修身」は本来純生活教科である。ところが、せつかく教材に児童の身近な事実を採用しても、その取り扱ひ方が完成道徳の立場からの要求なので児童自身の心もちの躍動が見られない。修身教科書の取り扱ひを国語教科書と大差なく読解、解説、記憶を主活動にするなら、道徳観念を教え、道徳意識を整理させるだけで、児童生活の躍動は目指されない。

修身の本質に規範性のあることは否定しない。しかし、規範は時に人を被律の状態に押し付け、澁刺^{はらつ}たる鑑賞、批判といった態度の自発を阻害しやすい。たとえば、けんかはしないに越したことはないが生活事実としてのけんかには規範以外の生活味がある。それに対して一応の生活的是認が与えられなければならない。児童の生活の中には友達と助け合う事実もあり、助け合わない事実もあり、助け合う時の愉悦感も確かにある。規範にする前にまず一応の生活鑑賞が与えられなければならない。修身の目的は児童生活の充実であり、促進であり、力づけであらねばならない。規範は教師の目当てに必要なのであつて、児童にはもつと内からの生活の充実によつてその方向へ進ませてゆけばよい。

社会道徳についても、今は社会生活によつて受けている便宜、幸福といった方面を、たとえば交通機関、娯楽機関、図書館等によつて鑑賞させればよい。ところが今日の修身は交通機関というとすぐに交通道徳を教えて、児童に真に喜び受ける心を発達させようとしなない。言い換えると社会に尽くすべき義務のみが強いられて、社会を愛するという大切な心は少しも養われない。生活を主題とする教科としてすこぶる奇異なことである。修身科が道徳への感興すなわち生活への感興を減少させるということほど奇怪な矛盾はない。

以上のように、倉橋は、「修身」の教授方法が子どもの生活から遊離する誤りは子どもを育てず教育目標を損なうことを、厳しく批判しています。

2 保育の「生活」における幼児期の道徳性とは

倉橋の、保育は子ども「生活」という主張は、実践方法（倉橋の場合「自発的」「相互的」「具体的」「習慣的」）の基礎になる考え方すなわち保育理念に、子どもの発達に従うという近代教育理念を据えたもので、当時「お稽古」と呼ばれて教授主体であつたわが国の幼稚園保育に対峙するものでした。しかし、遊びについては発達に即する近代的方法をとつても、道徳性という大人の文化価値へ導くためには教授・躰という封建的方法をとる以外ないのか。その突破口が、道徳は本来日常生活の中から生まれ、日常生活に生きるという性格です。倉橋の考察は発達に従つた道徳性の形成に集中されます。

幼児期の道徳性の内容検討は一九一九年の「かく育てたしと思うこと」から本格化します。この印象的な論は、後に幼児期の望ましい性情を「素直さ」「謙遜」「感謝・敬」としたうちの「素直さ」の内容に通じています。

一九二六年、「幼稚園令」が發布され、その保育目標の中の「幼児の善良なる性情を涵養し」という文言につき、倉橋は、①幼児期の道徳性の内容、②性情とは、③涵養という方法、の詳細な検討を行います。そして、保育目標へ子どもの発達に従つて達する子どもの「生活」を構築します。「系統的保育案」(一九三五年)です。

右掲①②③の内容を略述しますと、^註

① 幼児期の性情の善良さを導く方向について、今のままの純心という善良さ、道德的善良さ、法律的善良さ、宗教的善良さ等が考えられる。今のままの純心は幼児の持ち前だから方向をもたない。道德的善良さは悪に對する善の獲得であり行いを本体にするので幼児期には早すぎる。法律的善良さは少年後期、青年前期の訓練にこそふさわしい。そこで幼児期に向けていくのは宗教的善良さが最適と思われる。しかし、これは宗教教育を意味しない。幼児期の宗教的善良さとして素直さ、謙遜、感謝・敬、という三段階を考える。

② (イ) 発達という内発的要因と道德という文化的要因と、二つの異質なものが人の内一つになるのは、道德が、性情という意識では操作できない自然条件的な心の領域へ入って初めて可能になる。そうでなければ発達と道德とは別々で、道德を教えて習慣化することまではできても性情へ入って生活に自ずと反映する生き様にまで至ることはない。

(ロ) 性情とは性格の情的要素と考えた。英語でいうと to do ではなく to be、寝ていてさえ表れるその人の「ありよう」である。だから自分で意識して変えようとしても難しい。性情は、たとえば美にふれてうっとりしている時や安心しきって無警戒でいられる時に表れ、養われる。幼児期の性情は後にはさまざまな情操になるが、幼児期には性情である。

③ 涵養とは、潤し浸して養い育てること。教える、躰ける等の指導は緊張させて意識に入れる方法で道德については習慣化までである。子どもの性情の指導は子どもが無意識的な、うっとりしている、安心している等の状態のままですら指導になる。その方法は「いつとなく いつの間にか それでいて絶えず」^註になる。

以上、この大きな主題に関する倉橋の詳細な論の、まことに粗い筆者の素描です。

3 倉橋における保育の「生活」から小学校教科「修身」への連続性

2から、倉橋惣三が保育を、保育目標をもちつつ子どもの発達に従った生活になるように構築したことについては、素描とはいえ判断していただけたと思います。

また、保育の「生活」から小学校教科「修身」への連続性についても、1の彼の提言に認められるように、保育における道徳性のあり方が、修身の本来の性質上、小学校でも発展的に行われるべきと主張されていることについても理解されると思います。

発達に従った道徳性の形成は、近代教育が抱えた新しい大きな課題でした。フレーベルによる近代乳幼児教育の創造は、その課題に応えたものでもありました。乳幼児期の道徳性の形成について、「生命の合一」という方法によりさまざまな対象への親愛と喜びを次第に発展させて神への信愛へ至らせたフレーベル（註7）から一步進んで、倉橋は、発達に従った幼児期の道徳性の内容と性情への着目と涵養という方法により、現代保育をつくり出します。そうして道徳性という文化価値が人を信頼する心のやわらかさ、情緒の温かさ、穏やかさ、相手への親愛のこもった関心等に支えられて育つことを目指します。

また、2①に倉橋の指摘する発達の道徳的関心の領域に変化が生じることについても、当時としても、学校教育の段階（註8）ごとに詳しく検討されてよい事柄だったでしょう。

倉橋の保育目標論の内容、保育の「生活」の具体的マナー・ルール（註9）の内容とともに、彼の検討の進め方自体に、今日なお彼の論を知る意義を感じます。

（龍谷大学短期大学部）

- 注
- 1 同論は『倉橋惣三選集』第五卷フレールベル館一九九六年にも収録されている。
 - 2 倉橋惣三「保育入門」(『婦人と子ども』第十四巻第五号一九一四年)(復刻版 幼児の教育復刻刊行会刊 一九七九年 pp.229-236)
 - 3 倉橋惣三「斯く育てたしと思ふ」と(『幼児教育』第十九巻第三号 pp.103-117)『倉橋惣三選集』第二巻フレールベル館一九六五年 pp.220-236
 - 4 「系統的保育案の実際」日本幼稚園協会刊 一九三五年及び「系統的保育案の実際解説」(『幼児の教育』第三十六巻第三号・第三十七巻第一号、『大正昭和保育文献集』第六巻 日本らいぶらり一九七八年 所収。
 - 5 倉橋惣三「善良なる性情—われらの反省—」(『幼児の教育』第二十六巻第九号 pp.2-7)「幼児性情の涵養—講習筆記—」(同第三十五巻第八・九号 pp.100-163)「幼児の性情の涵養」(同第三十五巻第十一号 pp.51-86)。なお、戦後継続の論として「幼児保育の芸術性」(同第四十七巻第六号)、「幼稚園近感—東京都中央区教育界主催保育講演会筆記—」(同第五十二巻第二号)、「人間性の涵養」序論、(二)(三)(同第五十二巻第五・六・七号等)。
 - 6 倉橋惣三「生活訓練」年少組第一保育期第四週(注4)『大正昭和保育文献集』第六巻 p.47)児玉衣子『倉橋惣三の保育論』現代図書二〇〇三年 pp.212-214 参照。
 - 7 児玉衣子『フレールベル近代乳幼児教育・保育学の研究—F.フレールベル著『母の歌と愛撫の歌』の教育方法的検討から—』現代図書二〇〇九年 pp.447-464 参照。
 - 8 「系統的保育案の実際解説」(注4)の中の倉橋執筆「生活訓練」の全項目。児玉『倉橋惣三の保育論』(注6) p.171, pp.196-221 参照。